語源について　　第８回

前回に続き生活のなかに密着した言葉を中心に、言葉の知識を豊かにする。
　“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

・本領発揮：本来の持前を十分に出すこと。「いよいよ本領発揮だ」などと言うが、また、「ますます本領を発揮し出した」とも言う。
「本領」は、もと、代々伝えられた本来の領地の意で、「本領安堵」などと言うが、転じて、本来の持前、特色の意に使われたものである。「自分の本領を忘れる」などと言う。
・殺伐：ひどくあらあらしい様子。あらっぽいこと。「殺伐な気風」「人心が殺伐になる」などと使う。「殺伐」は、もと、人を殺傷することで、転じて、人を殺傷することを何とも思わないような、あらあらしい様子を言う。
・隅におけない：ばかには出来ない。あなどりがたい。案外に技倆ﾘｮｳがすぐれていたり、物を知っていたりした場合に、この言いかたを使う。「一見おとなしそうだが、どうしてどうして、隅におけない人間だ」などと言う。もとは、室などの片隅には置いておけない。堂々とよく見えるところに置かなければならないものだという気持から出たものであろう。
・大車輪：一生懸命なこと。熱心に精を出して働くこと。「大車輪に働く」「会社再興に大車輪だ」「大車輪で勉強する」。車の輪が大きくくるくる回ることからであろう。
・満を持する：十分用意して待つ。もと、弓を十分に引きしぼってそのまま構えるのが「満を持する」である。物事の極点に達したところでそのまま持ちこたえる意。「競技に備えて満を持している」「満を持して待つ」などと言う。
・出色ｼｭﾂｼｮｸ　:きわだってすぐれていること。他よりひときわめだって見えること。群を抜くこと。「出色の作品」「出色の出来栄え」などと言う。色やつやがきれいによく出るところからであろうか。
・おつにすます：妙に気取っている。「おつに気取る」「おつに構える」「おつに高くとまる」などとも言うが、「おつ」はまた「おつな味」「おつな感じ」「おつな手つき」「それはおつだ」などとも使って、「おつ」は妙なこと、一風変って趣きのあることを意味する。「乙」の字をあてることが多い。音楽で「乙」は「甲ｶﾝ」に対して、一段と低く下がるもの。また、低く、しんみりした音や調子。こういうところから出たものであろうか。
・逆上：取り乱してかっとなること。のぼせあがって精神が正常でなくなること。血が頭に逆上するからであろう。漱石の『吾輩は猫である』に「逆上の結果」「逆上の頂点に達した時」などとある。また「笑われてますます逆上する」

「話をしているうちに次第に逆上気味になって来た」などと言う。

・しらばくれる：知って知らぬふりをする。そらとぼける。しらを切る。「しらばくれて、なかなかほんとうのことは言わない」「しらばくれるのが実にうまい」などと使う。シラバックレルとも言う。

・たしなめる：人に反省をうながす。悪かったと分からせるように注意したり、しかったりする。「いたずらがあまりに過ぎるのでたしなめてやった」「無作法をきびしくたしなめられた」などと言う。

・肝に銘ずる：しつかり記憶する。心にきざみ込む。「あの時の君の言葉は肝に銘じて忘れない」。「きも」は元来、五臓六腑の総称であり、また特に肝臓を指すこともある。転じて、こころ、あるいは、きもったまの意に使う。

・俎上にのせる：批評するために取り上げる。「俎」は「まないた」のこと。「俎上にのせる」は料理するために、魚などをまないたの上にのせる意である。「俎上の魚」は、相手のなすがままになるよりほかない運命にあることである。

・天下り：上の方から押し付けること。「天下り人事」は官庁で、役人の古手などを、関連機関や民間会社に押し付けるような場合である。「天下り案」は、上部機構から下部に、あるいは官庁から民間に一方的に押し付けられた案である。「天下り」は、もとは、天上界から地上界へ降下することである。もと「天降り」と書いた。

・すげない：思いやりがない。つれない。そっけない。あいそがない。「すげない態度をとる」「すげないあいさつ」「すげなくあつかう」などと言う。漢字では「素気ない」と書くことがある。

・度を失う：あわててとりみだす。とまどう。落ち着きをなくす。「とっさの事で、すっかり度を失ってしまった」「ときの声に驚いて度を失う」などと言う。「度」は、物事の標準を表すものの意で、ほどあいである。「度が過ぎる」「度を過ごす」などと言う。

・懸念：気がかりなこと。不安に思うこと。心配。「懸念がある」「いささかも懸念がない」「懸念に思う」「懸念する」などと言う。「懸念」は、もともと仏教語で、一つの事にだけ集中させて、他の事を考えないこと。また、執年、執着の意である。なお、「懸」は、かかる、かけるの意で、音はケンだが「懸念」「懸想」の場合はケである。

“語源のたのしみ” 岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。　　（池田）